

余白の風

求道俳句誌

二〇一八年一月号
第二三〇号
奇数月二〇日発行

発行と一
幸白田
主余平

遅ればせながら、クリスマス・新年おめでとございませう。今年も俳句や短歌をつくりながら、「南無アツバ」の心を養いませう。

会員作品とエッセイ

*選評

名古屋・片岡惇子

枯菊の焚かれて天に香しき
さざんかや優しさ積もり濃き紅に
時雨るるや見知らぬ人とバスを待つ
光と闇包みし街や十二月
愚なる日々赦され仰ぐ寒満月
冬の日や大いなる御手我を抱き

*どの句も求道俳句として、完成度が高いと思います。己が罪や失敗を直視しつつ、アツバへの深い信頼を詠っていく。新年の巻頭に相応しい作品を、ありがとうございます。

竹原・藤居康二郎

妻と観し 沈黙踏絵 心打つ
沈黙で 母なる神と 相まみゆ
母なる神 踏絵恐れぬ 殉教者

お御風さまにつつまれて

南無 南無アツバ

唱えるしあわせ

わが喜寿と 金婚式の重なりて

感謝のうちに

南無アツバアメン

*奥様と金婚式を迎え、映画「沈黙」をご覧になった様子。真摯な信仰生活は、何歳になっても新鮮な発見と感動を伴う。

大阪・島一木

聖樹とて灯る教会の大きな木
久方や聖夜のミサで会ひし友
教会の尖塔のさき星冴ゆる
聖堂で赤ん坊笑ふ淑気かな
初ミサのあと追悼の式始まる

*⑤結婚式も葬式も同じミサのなかで行うカトリック。人の生死は断絶したものではなく、つながっている。死者と生者がともに交流できなければ、祈りの根拠を失う。

昭島・新堀邦司

汝もまたひとりぼつちかちちろ虫
月美しかぐや姫にも逢へさうな

宗教改革五〇〇周年記念礼拝

金秋や大聖堂に響く楽

山中湖

富士晴れて大白鳥の鳴き交はず

乙女峠の富士美しや小春空

*①家族や友がいても、ふと一人ぼつちに気づく瞬間がある。孤独感が根底にあるからこそ、連帯を求めてつながり合える。

高知・赤松久子

さまざまな思ひ忘れて初読書

読み続く「海辺のカフカ」去年今年

姑ははの味伝はりてをり娘この雑煮

真実を含む神話や冬夕ゆやけ

*①②読書対象Ⅱ本・活字から、さまざまに学ぶということはよく言われますが、読書主体Ⅱ私が、逆に対象となつて知らずに変化させられている、という見方もできるかと。

八王子・F・井上

ゆるし合うことにも慣れて共白髪
クリスマス希望のたねを賜りて
あたたかな光にそまるクリスマス
聖地争乱 福音は永久に在り

*①「慣れて」に感動。そうか、「ゆるし」は慣れなのかあ、と。愛し合うこと、ゆるし合うことは、理屈や歯を食いしばって努力することではなく、練習し、習慣化するものかも。

練馬・魚住るみ子

南無アツバ南無アツバと繰返し眠りに入
らむたまゆら覚ゆ

二階の手すりにふとん干すとき南無アツ
バ卒寿すぎでは下を覗かず

『風の道』

賀状の返しに震へる字もて書きたまひし
わが名は終の形見となりぬ

*①これは最高の境地かも。③年賀状の返信にあつた「わが名」が、送り主からの「形見」となつた。——わたしは最近、「南無アツバフト」と称して、井上神父の写真に一筆書いて配っています。

想い

東京・三浦味土里

椈もみの木に星をちりばめ類笑みしわが背子
逝こきてはやふたとせか

朝夕うつしえに写真と話す日々のこと待降節の口
ソクともして

*「背子」(せこ)は、親愛の情をこめて夫を呼ぶ
ときの言葉。亡くなくても変わらない夫婦の絆。
生者と死者の交わりは、キリスト信仰の原点です。

豊田・佐藤淡丘

水源の水絶えずして山眠る
白い指触れば山茶花こぼれけり
膨らみて寒満月の西に入る
寒暁の大地を踏み八十二かな
南無アツバ永くとどまる流れ星

邦人司祭が着任して、ここ五、六年教会の
玄関先に一對の「門松」が立てられるように
なった。実際に作業をするのは、壮年会のメ
ンバー達であるが、竹林から切りたての青く
太い筒は、今どきなかなか見事な出来映えで
ある。クリスマス期間と同居していること
もあり、「インカルチュレーション」(文化内受
肉)を敢えて探究しているつもりはありませ
んが、近所の人達の目をさそう一幅の風物詩
となりつつあります。南無アツバ、南無アツ
バ

*インカルは、必須の現象。一部の批判をお
それずに各自が実生活に即して行っていく。
いずれそれが自然の流れになっていくのでし
よう。

平田講座要約(第四九回)2014-7

(テキスト『心の琴線に触れるイエス』聖母文庫)

p・54

こうした両者のちがいがから、北森神学は激しさ、
重さ、パウロ的性格を感じさせ、井上神学はやさし
さ、(ある種の)軽み、福音書(とくに『ヨハネに
よる福音書』)的性格を感じさせるといふ、対照的
な結果になってくるのではないかと思います。

北森: 激しさ、重さ
パウロ的
井上: やさしさ、軽さ
福音書的

としましたが、「パウロ的」か「福音書的」か
という分類は、ちよつとおおざっぱ過ぎたと、今は思
います。

パウロの「初穂理論」などもやはり母性的やさし
さがあると思います——たとえば相手を裁かず受け
入れる——ある意味甘えをゆるすのが母性、とすれ
ば、イエスが神の国に迎え入れられるというだけで、
あとのみんなを無条件に連れて行ってくれる(ロー
マ一・一六)という初穂的発想は、母性的だと思
います。

余談ですが、昔、井上神父が「信仰とか祈りとい
うのは、ある意味、人間のいい加減さから来ている」
というようなことを言っていたことを思い出します。
その意味するところは、人間は最終的に自分で自分
の人生の責任がとれない存在であり、そうであれば、
最終的には何か——神にお任せするしかないものな
のだ、ということではないでしょうか。人間に、こ
の無責任性がなければ、宗教を求めないのではない
かと思えます。

ヨハネにも同じような発想はある、ということ
前にも指摘しました。

「ヨハネの場合は、むしろギリシャ教父たちが言
うように、こちらに来てくださって、みんなをぞろ
ぞろと愛で包んで、また向こうに戻ってくださった
という感じがありますよね。」(『パウロを語る』
(つづく))

新刊! 平田栄一著

『求道俳句集 アツバを呼ぶ』(A5版、

一八六頁、定価一、〇〇〇円、一八八〇円)



大きな活字で読みやすい!

初心以来三十年間に発表してきた求道俳句
の中から、定型句を中心に三百余句を厳選し
て一冊にしました。

井上神父は、イエスの教えとして最も大切
な「悲愛」の心と古来日本人の「物の哀れを
知る心」は根を同じくし、それは俳句道や歌
道につながっている、と述べています。
所収一句なりとも、皆様の祈りに響き合う
ものがあれば、幸甚の至りです。
ご注文は、平田までご連絡ください。

○南無アツバの集い&平田講座(於・四谷ニコラ
バレ)日時1/27(土)午後1時半〜。2/2
4(土)同、3/24(土)同。

—「余白の風」入会案内—

*どなたでも参加できます。購読のみも可

*年六回奇数月発行

*年会費千円(送料共)

*採否主宰一任

*お問合せはブログ「南無アツバを生きる。」余白メー
ルより